

# 「おもむいてくれないのー」考

戸田雅美

学生が、ある幼稚園の三歳児のクラスで保育を継続的に観察し、記録をとっていた。そして、次のような記録を持って、ゼミにやってきた。

## 幼稚園の三歳児、六月のある日の記録

園庭で遊んでいると、アゲハチョウが飛んでくる。アゲハチョウを見つけた子どもたちが、喜びの声を上げながらアゲハチョウを追いかけ始める。それを見た保育者は「たんぽぽ組さんと追いかけてっことしてみたいね」と声をかけ、子どもたちと一緒に追いかける。

ところが、しばらくすると、アゲハチョウは園庭の境のフェンスを越えて、外へ出て行ってしまった。それまで、笑顔でアゲハチョウを追いかけていた子どもたちの動きは止まり、急に寂しい表情になる。すると、保育者が突然大きな声で、

「チョウチョさん、ずるいじゃない！」

私たち飛べないんだから！  
と言いつつ、驚いてアゲハチョウと保育者を見ている子どもたちに、「ねー！」と声をかける。子どもたちも、そのとおりにいうようにうなずく。そしてなおも、空高く飛んでいってしまったアゲハチョウを求め

て、残念そうにしている子どもたちに、「チヨウウチヨさん、また来るよ」と話しかける。

この学生は、「もし、私だったら、子どもたちの寂しそうな表情を見たら、きっと『残念だったね』としか言えなかったと思う」と言う。聞いているほかのゼミ生たちも、皆同じだと言い、この保育者の「ずるいじゃない!」という言葉はすごい。どうして、こんなことが言えるのだろう」と話が盛り上がる。

私は、その話の盛り上がりにつき合いながら、「でも、どうして『残念だったね』ではだめなのか? 子どもたちは、寂しそうな表情をしていたのでしょ?」と問いかけてみる。問いかけている私に、用意した答えがあるわけではない。私自身も「ずるいじゃない!」というこの保育者の言葉のセンスに感動しながらも、でも、なぜ「残念だったね」よりよいと思うのか、どこが違うのかと、自問している。

記録を提出した学生は、記録をしなすでに、この意味を考えてきたのだろう。

『残念だったね』は、子どもの姿を外側から客観的に見た人の言葉であって、今、アゲハチヨウを追いかけていて、逃げられてしまった子どもたちの気持ちの内側に寄り添っていないと思うんです」と言う。さらに、倉橋惣三の『育ての心』（フレールベル館）の有名な文章である「心もち」を引用して、「心もちとは心もちである。その、原因、理由とは別のことである。ましてや、その結果とも切り離されるものである。(中略) その子の今の心もちにのみ、今のその子がある」という、まさに、その心もちに寄り添っていると思うと言う。学生なりに、何とか、そこで感じた自身の思いを解き明かしたいと、文献にあたってきたらしい。その言葉には、なかなかの説得力がある。

確かに、「寂しそうな表情」というのは、外側か

から見えることであつて、アゲハチヨウと追いかけて遊んでいる最中の心もちは、「寂しい」ではないだろう。でも「残念！」という気持ちはないとも限らない。すると、別の学生が、「残念！」と「残念だった」は違いますよね」と発言する。やはり、「残念だったね」は、どこか子どもものの心の内とは、離れたところからの言葉なのかもしれない。

振り返ってみると、私たちは、よく「残念だったね」と、いかにも子どもものに寄り添った言葉として使うような気がする。でも場合によっては、寄り添ってはいいても、子どもの心もちには、触れていないかもしれない……などと議論は白熱する。

「それにしても、この保育者はどうして『ずるいじゃない！ 私たち、飛べないんだから！』などと言えるのだろうか？ 見ていてどう思う？」と記録者への質問。ずっとこの保育者を観察しているその学生は、「とても自然に見えるんですよね。だから、こ

の先生なりに、三歳児になりきっていて、そこから出てくる言葉のようにも思えるのです」と答える。「多分、その先生に伺つても『自然に……』と答えるような気がする」と、その保育者を知る私も同意し、この日のゼミの時間は、そこで終わりとなった。

その後も、私の心の中では、この議論が気になっていた。もしかしたら、子どもたちは、「アゲハチヨウは飛ぶものだから、仕方がない」と思っていたのかもしれないと考えるからだ。少なくとも、この瞬間に本気で「ずるい！」と思う子どもは多くないだろう。その意味では、この言葉は、そのときの子ども「心もち」をとらえたものではなかったといえそうである。にもかかわらず、傍らにいる保育者によって、言葉として表現されてみると、まさにそのときの自分自身の「心もち」だったと、子ども自身、すくと胸に落ちてしまうような、「ずるいじゃない

「い！」はそんな言葉のように思える。子どもの傍らにあつて、保育という営みをもつ働きの一つは、こんなふうには、子ども自身も、すんと胸に落ちてしまふ意味を、「ともにつむぐ」ことであろう。

さらに、この事態からは、現在の子どもたちのおかれた状況が、照らし出されて見えてくるように思える。それは、たとえば、現在の子どもたちは、本気でアゲハチョウと追いかけてっこをして、本気で「ずるい！」と思える生活が保障されているかという問題である。



現在は、子どもが片時も大人と離れることのできない生活である。その中で、子どもの傍らにいる大人は、当然のことながら「アゲハチョウは、どうせ追いかけるものではない」と思っている。時には、そう子どもにも語りかけ、その動きをやめさせることも多い。子どもたちは、とても早い時期に「どうせ……」という事態に、予想以上に触れて育つに違いない。つまり、大人にとって無駄と思えるような、たぐさんのことの味わいを奪われて育つ可能性が高いという問題である。

「ずるいじゃない！」という言葉が意味することは、幼稚園という保育の場では、「どうせ……」など気にすることなく、本気で遊ぼうというメッセージになっただけではないか。

たった一言に込められた、保育の秘密に迫る愉しみを大切にしたい。

（東京家政大学 家政学部 児童学科 保育学専攻）